法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-27

映画評 チャップリンの「独裁者」・「人間の運命」

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
6
(開始ページ / Start Page)
79
(終了ページ / End Page)
80
(発行年 / Year)
1960-12-10

チャップリンの独裁者

一般の批評を綜合すると、チャップリンはこの映画でもって、独裁者の没落を予言したのだという。つまりヒトラーやムッソリーニの限界を、冷厳に予言してみせたのだという。『独裁者』が一九四〇年に製作されたことを考えあわせてみれば、或はこの種の予言説は正当な批評であるに違いない。しかし没落予言説に固執するのは、かならずしも賢明なことだとは思わない。

普通われわれが独裁者のイメージを想像する時、そこには、まったく万能で強大な権力をもった人間を登場させることになるだろう。少なくとも、独裁者という言葉から、巨大、万能、権力的チャンピオン等のヴォキャーブラリイを抽象できないのだとしたら、独裁者は独裁者としての意味をもたないのである。つまり独裁者とは、政治のメカニズムが許す、あらゆる権力の集合名詞としての意義すらもつものである。ところがチャップリンの描く独裁者ヒンケルは、かならずしも巨大で万能な人間ではなかった。権力組織のプロセスでは、確かに象徴的な人間かもしれないが、それはあくまで政治の魔術であり、独裁者ヒンケルとは、自己に確信のない、むしろ劣等感に支配された、精神的にはまったく被害者的な人間なのである。映画はまず、こうした独裁者ヒンケルと、一市民であるユダヤ人の床屋チャーリイが、まったく瓜双つな人間として登場するところから始まる。

床屋のチャーリイとは、唯容貌がヒンケルに似ているというだけにすぎない。彼は独裁者によって疎外された旧軍人とともに、ユダヤ人として逮捕され、収容所送りとなるが、ある日チャーリイはナチの制服をうばい去って脱出する。しかも彼は人々にヒンケルとして迎えられるが、このことは床屋のチャーリイにはまったく被害であり、それは予期しなかった偶然でもある。しかし床屋と独裁者が入れ変り、価値の転倒が演ぜられるのが、映画『独裁者』の意図だったのである。

そう解釈するなら、独裁者没落の予言を見るよりも、独裁者によって演ぜられる政治メカニズムに対し、はっきりと自由と人間性を主張するのがチャップリンのねらいだったと見るべきだろう。床屋のチャーリイの演説は、そのための大道具だったのである。そしてチャーリイはこんなふうに語るのだ。「いまや思想はある。しかし思想だけあって感情がない。それは人間性がないことだ。」

あらゆる社会の制度、組織等のプロセスで、人間メカニズムのモメントが氾乱する現代にこの言葉を生した時、われわれは冷水をかぶせられた思いにひたるのではないか。『独裁者』のチャップリンは、自己主張を未来にむけたのである。その主張は素的だった。

（F）

『人間の運命』

映画をみる前に一応の批評を頭に入れてから鑑賞することになっている。場合によっては見たあとで批評を読むことにしているひともあるが、専門家でない筆者は前者に属する方である。ところがめずらしく「人間の運命」の批評はまだ読んでいない。一つだけ映画館のパンフレットで荻昌弘の批評を見たあとで読むことができたが、そういうわけで素手で鑑賞することになった。

素手といっても、二年ほど前に「新日本文学」であったと思う（今手許にないので確められない）ショーロホフの原作を読んでいたので、作品内容は知っている。あとで、この短編小説が映画化されると聞いたときにはひそかに驚いた記憶がある。――平凡な大工を職業としているソロコフは、独ソ戦争でドイツ軍の捕虜となり、この世のあらゆる苦しみを味わう。生きのびて故郷に帰ってくると、妻子は空襲で死んでおり、また息子も戦死するという悲劇がおそいかかる。彼はどうしてこうも耐えがたい苦しみばかりが運命となるのだろうと絶望的な境地に落入っているとき、孤児のワー

ニャに会う。ソロコフはその孤児の新しい父親となることで新しい運命を切り開く、といった素材をとらえながら、作者は荘厳ともいえる人間の尊厳と平和のたたかいを坦々と描いている。この芸術内容を映画化する場合に、いわゆる「雪どけ映画」の平板に流れなければよいが――という危惧もそこにはあった。

だが、百聞は一見にしかず、というものであろうか、そういう危惧というものは、もともとたよりないものであるが、映画「人間の運命」ほど原作の芸術内容を深くとらえているものはない、といっていい。

何でも新しいものであればいいということで、やたらに珍奇な風潮が流行するかと思えば、反対に古いものばかりに固守するという風潮も同時にあるこの頃の映画界で、言葉の真の意味での新しい映画作品である。単に手法が斬新であることを新しいというのではなくて、現代の典型をめざしてさまざまな試みを重ねて来た戦後のソ連映画が、これまでの欠陥であった現代性の形式化を克服して、ようやくリアリズムの軌道にのったという点で新しいのである。この現代性を見事にえがいたセルゲイ・ボルダンチックの綜合力は『虹』『若き親衛隊』『戦争と貞操』をはじめ『大いなる幻影』などの伝統を生かしているところにも新しさがある。

一兵卒ソロコフとドイツ軍将校との対決、孤児ワーニャに対するソロコフの愛の場面は圧巻であり、その古武士的な態度(福田定良氏の言葉)、清潔で楽天的なヒューマンな感動は、ソ連映画ならではの醍醐味でもある。この醍醐味は、平凡であるようでいて、やはり第一級のものではないだろうか。

(Z)

編集後記

安保闘争の昂揚期からすでに半歳近くたとうとしている。当時多少とも事態をまともにつたえようとしていた新聞、週刊誌がさいきんは「安保さわぎ」などとよんでいる。無節操なジャーナリズムと慷慨してみてもはじまらない。むしろわれわれにとって必要なのは体験を思想にたかめてゆくこと、思想問題として安保闘争を点検することだろう。巻頭の特集の意図もそこにある。なお多くの諸兄の意見を聞きたい。安保は依然として現在の問題なのである。

総会で編集メンバーも一新された。従来の内容がやや「不易」に傾いていた点を反省し、「流行」の面を出すために努力したつもりだが、どうか。

「ジグザグデモなら若い人に負けませんぞ」と、安保闘争で大いに気を吐かれた近藤忠義会長、来年は還暦をむかえられる。教授にふさわしい記念事業を、と目下プランが成熟しつつある。諸兄の積極的な協力をえたい。

一九六〇年一二月一〇日発行
定価 八〇円
日本文学誌要 第六号
編集委員 法政大学国文学会
近藤 忠義 小田切秀雄
小原 元 正木 信一
阪下 圭八 杉本圭三郎
田中 喜一 小林 茂夫
安江 武夫
印刷者 東京都中央区銀座東三ノ七
東銀座印刷出版株式会社
電話東銀座(541)三九四七
発行所 東京都千代田区富士見町
法政大学院内
電話東京(301)二三五一番
振替東京六九四三番